「日々の理科」（第 1378 号） 2018（H30）,-4,15

「春の嵐とケヤキ（２）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

強風で落ちたケヤキの枝についていたものは、「ケヤキの果実」である。ケヤキは春に葉が出る前に開花し、その後結実する。風媒花で目立たないこと、それに高木で枝が高い位置にあるので、花に気づく人や子どもは稀である。私もケヤキの花をじっくりと観察したことは一度もないような気がする。

下校時に５年生の子どもたちに、このケヤキの果実のことを教えてあげた。子どもたちは意外に興味を持ったようで、しばらく観察してから持ち帰っていた。

これがケヤキの若い種子の拡大写真だ。いびつな球形で、頭部に柱頭（めしべの先端）がまだ残っている。ケヤキの果実は葉の付け根にたくさんついている。その中に種子ができるのだが、果実は熟しても開かない。これを「非裂開果（ひれっかいか）」という。

果実は秋になって熟しても、そのまま枝についていて、「枝・葉・果実」が一体になってクルクル回転しながら、風で遠くに運ばれる。ケヤキの場合、果実にも中の種子にも翼や綿毛がないので、枝と葉を「風散布体」として最後の仕事をさせているのだ。

（上のスキャナー画像は２ページ目に拡大）

しかし、今回の春の嵐は、大量の未熟な種子を落としてしまった。当のケヤキにとっては大打撃だろうが、私にとっては、すばらしい教材をもたらしてくれた。